

## ジャバに於ける佛教

ラ  
バ  
ー  
ト  
ン

通譯者 鈴木貞太郎

私は日本語でお話をせず、英語でするのは残念である。私は御紹介の如くジャバに居た。ジャバは色々の旅行者の多い所で何れも賞めて東洋の花園で太平洋での美しい島であると云ふてゐます。單に土地が麗しいのみならず人民も風俗も研究に値するもので、その文學も吾々の注意を拂ふべきものがある。がこの國には歴史がない。これはこしらへる材料がないので、換言せば平和が長い間續いていたのでそれが却て好い徵候であると思ふ。

ジャバの地理を云ふと二千四百平方里、住民三百萬以上居るのである。而してこの人間の生活が頗る單純である。それで要求するものとしては大<sup>た</sup>してなく。生活は柔和で丁寧である。又人に對しての禮讓を守る國である。こゝに三四の國語がある。それにもかゝわらず上の人に對して又は下の人に對して夫々異つた國の言葉を適當に用ひて丁寧さを盡くすのである。かゝる敦厚性の來る所は佛教の感化を受けたからだと思は信ずる。最近三百年から二百年の間は佛教が二つの國から追はれ

て回教が勢力を得た。

このジャバの國は余程佛教の文明文化が影響してゐるので、佛教の文明文化で注意すべきはジャバに於ける佛教は最初から大乘佛教であつたことで、ビルマ、シヤムなどには何れも小乘佛教が行はれざるにもかゝらず、これは大乘佛教で——そうでないと云ふ人があるけれども自分としては大乘佛教が初めから入つたものと認めてゐます。

ジャバには數多の過去の遺蹟がある。而して佛教の入つてきたのが今から二千年にはならぬが、キリスト紀元後七十八年であるから計算すると一千四百四十六年になる。これが丁度迦膩色迦王の即位の時で、馬鳴や龍樹の時代と相應してゐるので、その時に佛教がジャバへ入つてきたのである。而して尙今日でも釋迦紀元を用ひてゐることも注意すべきで、今日では宗教としてはマホメット教であるけれど、紀元は佛陀紀元を矢張り用いてゐる。

西曆紀元九百年迄の即ち日本の近喜時代にブランバーナン・デイエングに佛寺が建てられたのである。然るにこの九百年頃に非常な地震が何か天然の變動が生じた爲めに中央部が悉く破壊せられて、東の方が若干か殘存している。このことは遺物の書き記し殘されたものに依つてかゝる變動のあつたことが分かる。それでジャバの紀元を二つに分つことか出來得るので一は西曆九百年迄の紀元、それは中央ジャバに用いられたもので二はこの中央ジャバが海嘯の爲めに引きさらわれた後、

東の方が残つて東の方に紀元が用いられ、東の方の紀元が九百年を劃されて一千四百七十八年にきてゐる。

この第一紀元の時代には何も残つてゐないので唯傳説のみが残つてゐる。それはアヂサカに書かれてゐて、まだ歐語に譯されてゐない。私はこの書にジャバの紀元のことを書かれてゐるので譯したいと思ふてゐる。次に第二紀元に屬してゐる九百年から一千四百七十八年までの時代のことを書きつけた書物があるよりも貝葉に書かれたものがジャバの東部に澤山残つてゐる。

このアヂサカに書いてある傳説を云ふと、西曆七十八年にジャバに來たことになつてゐる佛敎者が二人の傳道師を連れて印度からきて印度文化をジャバに傳播することになつたのである。その時ジャバでは人間の肉を食してゐた。今日では全々そんなことはないが、この馬來群島では五十年前まではそれがあつたのでキリスト宣敎師も食べた云ふ。ジャバでは然らず。その止んだ事情と云ふのはかうである。その當時のジャバの王様であるデバタチンカラが印度から傳道師を二人連れてきた佛敎者を食べ様ふとした時、王は氣毒だから汝をたべる、それで汝の希望があつたら聞くことにすると云ふと、佛敎者は希望があると云ふ、それは幾程の地面を私の弟子にやつて呉れ、その地面と云ふのは手拭を頭にまいて、これ位を私に下さいとの希望です。王はそれならばやると約束して、そこで大勢の前でその手拭を廣げると、いくらでも廣がるので遂に南の海の際まで廣がつて、

王様は自分の行く所もないので、海に飛び入つて鱈になつたと云ふ。その鱈がまだ今でも生きてゐると傳説されてゐる。かく王様を南の海に追ひやりてからアヂサカがジャバの王となり、それから自分の二人の弟子の中の一人にお前は山に行つて山の仙人になつて居れ、その居る間にはこの小刀を誰の手へも渡さぬ様を持つてゐて大切に保存せよ。その小刀は印度の貝葉を彫り付けるに必要なのである(そうである)。そこでそれをお守りするとなつた。王は然るにこの小刀をその意味で預けたことを忘れて他の一人の弟子にその小刀を必ず取つて来いと命じた。そこで一人の弟子が小刀を要求した時に、一人は人の手に渡してならぬのが王の命なれば渡さまいとし、又一方は小刀を受取りて歸るのが王の命であると、こゝに争ひが出来て二人共死んだ。王はいくら待てども小刀も二人も歸らぬので自から行つて見るに、小刀は二人の間に置かれてあつた。王はそこで初めて如何なる理由で死に又二人は主命に脊むかずして主命を好く守つたかを知り、感心してそこで王はその小刀を持ち歸りて小刀で二十字の文字を彫りつけた。それは日本の『いろは』の様に意味があつて二人とも忠實で死だ意味をこの二十字に現らはして彫りつけたのである。

この文字が今日でも多少異つては居れど用いられてゐるのである。(文字を示めし説明をする)この文字は不思議にも阿育王の石碑に使はれてゐる文字に似てゐるので或はそこから出たとも云はれるが實際は分からぬ。又印度の方ではこれが佛敎のチャクラ(輪)のそれから變つたとも或はエヂブ

トの象形文字から變つたとも分からぬ。兎に角、阿育王の石碑に似てゐることのみは直實でかゝる文字は二から三百程まであるけれども大體に於いて皆似てゐる。印度南方はドラビダ、北方はデーバナーガリーで、これも形ちはジャバの方と同じ所から出たとも思はれる。前者は日本の卍字でKが最初の文字であると云ふ。

最初かゝる言葉の出來たのはチャクラから出たと云ふ假定から云ふと卍字は輪の動く、太陽の動くに象かたどりん四つものゝ集合發敬を略したのが基となつて色々こしらへあげたのもある。

このアヂサカにはまだ他のことも書いてある。玄奘三藏の西域記には馬來群島を尋ねたこともある。支那の歴史に依れば十八世紀にジャバから支那へ使節を送つてゐる。而してジャバから支那へは金、銀、象牙、犀の角つゝを持ちゆかれたとある。一千七百七十四年の頃にはイスラム女王がジャバを支配しておられたと云ふので、平和で富に榮えて美しい寺も澤山に建つたと云ふ。この國の平和は戸は夜に閉さず道に落ちたる金は拾はずと云ふ程であつた。そのことを試るために金を道に落ちておいた時に誰も拾はず、太子がそれを踏んだとのことで罪をうけ齒を一本抜かれたと云ふ。これは女王としては余りに亂暴の様なれど、それ位まで國が平和であつたことは支那の方から得た史料から云ふたのである。

このジャバに佛教の寺が建てられたことはニポールの歴史にあるので七百三十一年のことであつ

た。又處々色々の石碑に彫り付けたものがある。その西部のジャバにあるものは紀元後四百年のもので、そこに彫りつけたものはビシヌ派のものである。中央ジャバのものは、そこに書き付けたる文字にデーバナーガリーで、王名は *Satavahana* であつたことも、その遺蹟の碑文から分かる。

中央ジャバにシバの遺蹟がある、又大乗佛教の遺蹟もある。然しそこにかゝる二つの宗教が併行的にあつたと云ふことはこの二つの宗教の間に寛容の心地があつて到る處に行はれてゐたことは、かゝる點から見ても分かるのである。

この一番古く時代が附せられて残つてゐるものは佛教のカラサンと云ふ寺で、紀元後西暦七百七十八年、日本では恒武帝の時弘法の居られる頃で、その時の王をセレンがと云ふのである。また他に大きな寺もあるが、これには時代が分からぬ。大きな寺とはボールブルの寺であるが、その寺に書きつけられた文字から考へると即ち七百七十八年頃のものでないかしらぬと思はれる。このボールブルカには大きなモニュメントが建つてゐて、約千四百の圖が彫りつけてあり、それは佛一代の歴史を彫りつけたもので、普曜經、華嚴の法界品のガンダブユーハ、法華經のことなど又普賢の行蹟などが讀み得る極めて豊富な佛教の材料があるのである。

この地の佛教が大乗佛教であつたことの證據は………(圖説に依つて)こゝにある佛、菩薩の数が四百三十二體ある。これが四方に分かれると一方に一百八體である。この四百三十二體の中には各

種の大菩薩が居られ、そこには最後の衆生の一人が救はれるまでこの世界に残ると云ふ普賢菩薩の像も見ることが出来る。

これからジャバに於ける大體、佛教に就きて云ふ。この紀元九百年にこの地方に大天災のあつたことは確かなことである。一體ジャバには二十二個の火山脈があるので、かゝる事があるのも自然のことと思ふ。今日も尙地震があつて近頃の新聞の報道する如くである。ある時地震が大海嘯かゝあつて王子が東ジャバに逃れて行つた。そこで婆羅門の人に教へられて山に逃げ、仙人に教はりて木の皮の着物をきていたのである。この婆羅門の人はビシヌ派の人であつたと云ふ。かく地震を逃てからアガジタ王に許しを得て印度の文化を卸賣的に輸入し様ふと考へそのラーマヤーナやマハーラーバタをジャバ語に直したのである。この譯が紀元一千年のものであらう。その一部がバーリーに残つてゐる。バーリーは今でも佛教の残つてゐる所である。

この一千二百九十二年にジャバの方へ支那から使節を送つたがこの使節が何かジャバの王の十分に萬足を得ず、悪い報告を支那へ持ち歸つたので勿<sup>フビライ</sup>必烈の怒に觸れ、ジャバを征服することになつた。その時ジャバには二派に意志が分かれ一方は元の侵入に手助けをする。而してジャバの一部のフレリーを征服してしまつた。その時ジャバは支那人に反對して支那人を國から追ひやりマジチャイトなる王國が一千二百九十四年に建てられた。

このマジヤバイトの國が勢力を持ちて來て遂には馬來群島を征服し、マラツカ海峽にまで領土を延ばした。このことはその方面まで文化を廣ろめることには力があつたので、今日残つてゐる遺蹟はその當時のものが多い。般若の權化(女性)の像はその一つである。

この一千四百七十八年に今云ふたマジヤバイト王の息がスマトラの方からマホメット教を弘通する様になつたのは王が寛容でこの教を信することを許したので王子はマホメット教を弘めて他の宗教を壓倒したのみならず王位も覆へした。その時恰かも一千四百七十八年で、それ以來今日の様にマホメット教がこの地に弘まりてゐるのである。このマジヤバイトの息がかくの如く自分の家を覆へして他の宗教を持ちて來たと云ふ不忠實が、今日ジャバガオランダ領となさしめたものと考へてゐる住民も澤山あるのである。

ジャバの文化は佛敎と印度敎ヒンズーとで色付けられてゐる。支那の影響感化は全くないので、支那の孔子、孟子又は文字思想には没交渉で、印度の勢力がジャバに行はれたのである。これは梵語の書がジャバに澤山入りこんできてゐるのを見ても如何にジャバは印度に多大の影響を受けてゐるか知られるのである。

かくマホメット敎が入つてきたのにもかゝわらず。印度文化を承け次いでジャバ人は佛敎を忘れず、佛敎を阿含(佛陀の敎)として、今でも記憶されてゐるのである。私がジャバで印度の思想に關



する會をする時には、マホメット敎の人もそこへ來て、佛敎の話をするのを喜ぶのである。大谷光瑞師が『ジャバ佛敎』を調べられた時にもそうであつたと、その時會はれた人の話を直接に聞いたのである。かく今日でもまだ瓜哇民は内心佛敎であるからこゝに熱誠な佛敎傳導師をば待つてゐる次第である。(文責在記者)